

主体的で創造的な鑑賞と表現のかかわり

～打楽器を使った実践より～

内垣 美佳

日常生活の中には様々な音や音楽が溢れている。子どもたちの様子を見ていると、生活環境やこれまでの音楽経験によって音楽への関心・意欲には個人差があるが、曲を口ずさんだり、曲に合わせて体を動かしたりすることを好きな子が多い。子どもたちには、音楽活動を楽しんでほしいと考えているが、さらに自分の思いや意図をもって表現することができる力を身に付けてほしいと願っている。本実践では、鑑賞で得た学びや気づきが表現を深め、さらに質の高い表現へと結びつけることができると考え、表現と鑑賞を関連付けた単元を構成した。また、仲間とかかわり合いながら音楽活動することによって、自分の音楽表現への思いや意図を深めてほしいと考え、自分と仲間との音楽表現を見比べたり、聴き比べたりする活動を取り入れた。音楽にはどのような表現方法があり、どのような表現の工夫ができるのかということを知り、「ここはこんなふうに演奏したい」などの自分の思いや意図をもって楽しんで表現する子どもが育つことを目指した。

キーワード：思いや意図、比べる、表現と鑑賞の関連、打楽器の音色、「森のカーニバル」

1. 研究の目的

今年度の学校提案「学びをデザインする子どもたち」を受けて、音楽科では①学習したことが使えるようになること②学び続ける目標がもてることが「学びをデザインする子どもたち」の姿であると考えている。そのような子どもたちの姿を目指し、1学期から「比べる」をキーワードにして、思いや意図をもって表現できる力の基を育むための主体的で創造的な鑑賞の在り方を探ってきた。子どもたちは歌ったり演奏したりする音楽活動自体を楽しむことはできても、音楽にはどのような仕組みや要素があるのか、どのような表現の工夫が出来るのかを知らなければ、思いや意図をもつていても表現につなげることができない。どのような鑑賞を行うと、鑑賞で得た学びや気づきが「このように表現したい」という思いや意図を膨らませ、楽しんで表現する力につながっていくかを明らかにしたいと考え研究を進めた。

また、ペア活動やグループ活動などを取り入れ、どのような仲間とかかわり合いが、互いの表現を深めることにつながるのかを探っていききたい。

2. 研究の方法

2. 1. 単元の構成

(表現と鑑賞の関連を図る)

音楽科学習は主に活動が主体となる。まずは、「おもしろそうだ」「やってみたいな」などの学習意欲を引き出すために、身の回りにある物に着目し、音さがしや音遊びから始める。次に、歌唱・音づくり教材「かぼ

ちゃ」(桑原ほなみ作詞／黒澤吉徳作曲)を打楽器は使わずに身の回りの物から出る音だけで演奏する。そして、打楽器の音色を味わうことのできる鑑賞教材《「山のポルカ」による森のカーニバル》(石桁冬樹作曲)を鑑賞して得た学びや気づきを生かして今度は打楽器を使って、再び「かぼちゃ」(桑原ほなみ作詞／黒澤吉徳作曲)を演奏する。表現→鑑賞→表現という単元構成によって、表現への意欲がさらに高まり「自分ならこう演奏したい」という思いや意図が生まれるのではないだろうか。「森のカーニバル」を聴いて感じた打楽器の音色のおもしろさや奏法の工夫、音の響きのバランスなどを生かした自分たちの思いや意図が込められた演奏ができればと考える。

2. 2. 比べる活動を取り入れる

新しい曲を歌ったり、鍵盤ハーモニカなどで演奏したりすることに積極的な子どもたちであるが、もっと「聴く」力を身に付けさせたいと考える。音や音楽はもちろんのこと、仲間の気づきや感じ方、仲間の演奏などを「比べる」活動を通して聴かせるようにする。その仲間の気づきや演奏表現などのよさをどのように捉えて、自分の表現にどのように生かしていくのかをしっかりとっていききたい。本研究では、仲間とかかわり合うことを大切にしながら、以下の3つの比べる活動を取り入れる。①素材や奏法、音の重ね方などによって、異なる打楽器の音色を聴き比べる。(表現・鑑賞)②自分と仲間が出す打楽器の音色を聴き比べる。(表現)③自分と仲間の打楽器の音色の違いに対する気づきや感じ方を比べる。(鑑賞)

3. 授業の実際

3. 1. 題材の目標

ここでは、2年生で行った題材《「森のカーニバル」～いろいろな音にしたしもう～》の実践について報告する。

＜本題材の目標＞

- ・いろいろな音や音色の違いを味わいながら表現したり聴いたりすることができる。
- ・音色の違いを生かしながら奏法や音の重ね方を工夫して、拍の流れにのって演奏することができる。

3. 2. 使用した教材について

教材名：歌唱・音づくり教材「かぼちゃ」（桑原ほなみ作詞／黒澤吉徳作曲）

鑑賞教材《「山のポルカ」のよる森のカーニバル》（石桁冬樹作曲）

「森のカーニバル」は、子どもたちが2学期に入ってから鍵盤ハーモニカで演奏した「山のポルカ」（芙龍明子日本語詞／チェコ民謡／飯沼信義編曲）の旋律がもとになっている。授業では、よく目にする打楽器が素材や奏法、音の重ね方などによってそれぞれ特徴のある音色を生み出すことに気づかせたい。また、奏法の工夫（強弱など）や問いと答えのおもしろさを感じ取らせることで、打楽器の魅力をさらに味わわせたい。

3. 3. 学習展開の実際

3. 3. 1. 音さがしや音遊びをしよう！

（第1次）

日常生活の中には、さまざまな音が溢れているが、空き缶や箱、木片など身の回りにある物もたたいたり中に何かを入れて振ってみたりすることでおもしろい音を出す打楽器の一つとなる。第1次では、身の回りにある物に着目して音や音色への興味・関心を高めることをねらいとした。

・＜音当てクイズ＞本題材の導入として、教師が用意した7つの手作りマラカスを紹介して音当てクイズを行った。ペットボトルや空き缶などの中に石ころやビーズ・クリップなどを入れた手作りマラカスを教師が振り、中に何が入っているかを当てさせる音遊びである。このクイズを行う際に、ワークシートを用意し、中に入っていると予想される物と聴こえてきた音をオノマトペで書き込むようにした。オノマトペで書き表すことで自然にしっかり耳を澄まそうとする子の様子が見られ、それぞれ似ているようで微妙に異なる音の変化にも気づくことができていた。日頃あまり進んで挙手しない子も「シャラシャラという音がするから砂だと思う。」などと自分の感じたことを楽しそうにオノマトペを用いて発言することができた。

・＜手作りマラカスを作ろう＞音当てクイズをした後、子どもたちから「ぼくもそれ作るん？」という声が聞えてきた。「作ってみたい。」という思いが膨らんで

きた様子も見られたので、家や学校にある身の回りにある物を使って手作りマラカスを作った。中に入れる物にこだわりをもっている子がいたり、「かざりをつけたい！」と言って自分のオリジナルな楽器になるように工夫したりする子の姿が見られた。ここでも聴くことを大切にしておしかったので、自分のお気に入りの音になっているかよく耳を澄まして聴きながらマラカスを作るように促した。（図1）

・＜まねっこ遊び＞始めは教師がカウベルでリズムを打ち、その聴こえてきたリズムを手拍子で真似させた。慣れてくると教師の代わりに子どもが順番に前に出て自分で考えたリズムを打ち、他の子がそのリズムを真似した。少しずつ打楽器に触れさせ、打楽器の音色を耳にしていけるようにしたいと考えて、真似る側は手拍子だけでなく、タン布林・カスタネット・すずなどを交代して使い、みんなが楽器に触れることができるようにした。

・＜音のリレー＞4～5人の7つのグループに分かれてグループごとに音のリレーを行った。タン布林・すず・カスタネット・ギロ・カウベル・トライアングルなどの身近な楽器を使った。（図2）音のリレーをするグループとそれを聴くグループに分かれ、交代しながら行った。聴く側には、ワークシートに聴こえてきた音をオノマトペで書かせた。グループの子が鳴らす音によく耳を澄まして、大切に音を出そうとする子の姿が多くみられ、2周目は1周目と違う音を鳴らそうとするなど、工夫して音を鳴らしている子もいた。しかし、仲間の鳴らす音や自分の鳴らす音に耳を澄ますることができずに力任せに音を鳴らしている子もいた。



（図1 手作りマラカス）



（図2 音のリレー）

3. 3. 2. 音の重なりを楽しみながら演奏しよう！～「かぼちゃ」～（第2次）

まずは、全体で「かぼちゃ」（桑原ほなみ作詞／黒澤吉徳作曲）の曲の感じをつかみ、拍の流れにのってリズムパートの練習を行い、歌と合わせてリズムを打てるようにした。次に、4～5人のグループに分かれてリズム打ちの分担を行い、手作りマラカスを使って練習した。練習した後、グループごとに演奏を発表した。手作りマラカスによるリズム打ちはほとんどのグループがリズムにのってできていた。子どもたちはこの曲をとてにも気に入って、楽しんで演奏していたが、手作りマラカスの音に慣れてしまっていたこともあり、手作

りマラカスの音を丁寧に出そうとしたり耳を澄まして聴こうとしたりすることができていないグループも見られた。他のグループの発表を聴いた子どもたちのワークシートには、「○○ちゃんのマラカスのお米の音がよかった。」「だんだん大きくなるところが上手だった。」「シャシャという音がすごくかわいい音でした。」などの感想が書かれてあり、きこえてきたマラカスの音をオノマトペで書いている子もいた。

3. 3. 3. いろいろな打楽器の音色のちがいを味わって聴こう！～「森のカーニバル」～（第3次：1／2時間）

第3次では、鑑賞を2時間扱いで行った。第1時では、《「山のポルカ」のよる森のカーニバル》（石桁冬樹作曲）の曲の始まりの部分（「山のポルカ」の旋律が出てくるまで）を聴かせた。子どもたちは、今までの経験や本題材の第1次に行った音リレーなどで打楽器に触れてきていたため、一度聴いただけでも打楽器の音色や動物の名前を聴き取れていた。次に、「動物は何匹いると思う？」という発問に対して子どもたちから「もう一度聴きたい。」という声が上がリ、とても集中して耳を澄まして聴こうとする子どもたちの姿が見られた。8匹という答えを出せた子はクラスの4分の1ぐらいだった。ここで、初めて教科書を開くように指示した。教科書にはとても賑やかで楽しい雰囲気の挿絵が載っているの、その挿絵を見ながら本当に8匹の動物たちが出てきているのかをうれしそうに指さしながら数を数えていた。



（図3 グループによる鑑賞活動くワークシートを使って）

次に、どの順番でどの打楽器をもった動物が登場してくるのかということに視点を当てて聞かせた。まずは、教科書の挿絵を見ながら聴こえてきた楽器（動物）を一人一人が指さしながら聴いた。ほとんどの子どもが集中して聴き、聴こえてきた打楽器（動物）を指さすことができていた。しかし、本当によく聴いていないとどちらの動物が先に登場するのか聞き逃してしまうような箇所があり、その箇所になるとややこしそうにしている子どもが多く見られた。そこで、次は4～5人のグループに1枚のワークシートと8匹の打楽器を持った動物のパーツを配り、どの動物がどこで登場するかの並び替えを行った。C：「これとこれどっちが先に聴こえてきた？」C：「分かりにくかったなあ。ほ

くはこっちの動物の音聴いとくから、そっちを聴いてくれる？」などの会話をしながらグループで相談して、登場する微妙な差にもよく気が付いて並び替えをすることができていた（図3）。その後全体で出てきた順番を確認し、最後にワークシートの並び替えた動物のところに一人一人お気に入りの楽器はどれかを決めて名前を書かせた。「続きを聴きたい！」という子どもたちの声が聞こえてきたので、次時への意欲につなげることができたと感じた。

3. 3. 4. いろいろな打楽器の音色の特徴や表現のおもしろさを感じ取って聴こう！～「森のカーニバル」～（第3次：2／2時間）

前時では曲の始まりの部分（「山のポルカ」の旋律が出てくるまで）だけを聴かせて学習したので、まず、この続きも含めて全曲通して聴いた。気づいたことを発表させると次のような意見が出された。C：「山のポルカが聞こえてきた。」C：「木琴だけじゃなくて、マリンバの音も聞こえてきた。」C：「曲の途中でおもちゃのチャチャチャみたいな感じのところがあった。」

次に、打楽器の音の響きのバランスを感じ取らせたいと考え、「山のポルカ」の旋律部分だけを聴いて、重なり合っている打楽器の音色から大太鼓の音色だけを聴き取り、大太鼓の音色に合わせて打つ真似をさせた。この時に、仲間の様子を見比べられるようにするために、クラス全体を半分に分けて行った。

次に、強弱や間いと答えの表現のおもしろさを感じ取らせたいと考え、曲の始めの部分の聴かせた。うさぎ（すず）が遠くからだんだん近づいてくる様子をクラスを半分に分けて、手作りマラカスを使って実際に表現させてみた。子どもたちの様子から手作りマラカスではなく、実際にすずを用いた方が効果的であったと感じた。また、うさぎ（すず）とさる（タンブリン）がお話している様子をペアになって手拍子でやってみてから、1組のペアに前で楽器を使って発表させた。問いと答えの表現をいきなり子どもたちにさせるのは難しいと考え、うさぎとさるのセリフを教師が考えておき、そのセリフを手拍子で表現させるという方法をとったが、セリフは出さない方が良かった。出さない方が子どもたちはもっと自由に感性豊かに表現できたと思う。最後に、教科書の挿絵を指さしながらもう一度全曲通して聴いた。

3. 3. 5. 音色を味わいながら演奏しよう！～「かぼちゃ」～（第4次）

打楽器の音色を味わう鑑賞をした後、もう一度表現を行った。第2次で手作りマラカスを使ってグループごとに演奏した「かぼちゃ」を今度は打楽器を使って演奏することにした。「森のカーニバル」を鑑賞したことによって、打楽器への興味は高まっていた、打楽器を使って演奏することに子どもたちは喜びを感じていた。グループごとにどの打楽器を使うのかを考え、さらにワークシートに、①音の強弱②音のバランス③い

きの合わせ方などについてグループでどのように工夫したいかを考え、記入してから練習に取り組むようにした。

<ワークシート記入例>

- ・どの楽器の音も聞こえるように、最初一人目は音を大きくするけど、二人目がやる時は、一人目の人は音を小さくする。(音のバランス)
- ・「どのくらい」のところでは中ぐらいにして、弱い音から大きくしていく。(強弱)
- ・さいしょ小さい音からだんだん大きくするようにする。(強弱)
- ・友だちの音をよくきいてから音をならす。
- ・リズムについていく。
- ・みんなで顔を合わせてえんそうする。
- ・タイミングを合わせる。
- ・チームワークを大切にする。

そして、最後にグループごとに発表し、自分たちのグループの演奏と比べて良かった点などの感想を発表し合った。

4. 授業の考察

本題材では、表現と鑑賞の関連を図るために、表現→鑑賞→表現という単元構成で学習を展開した。第1次で行ったまねっこ遊びや音のリレーなどの音遊びは、音楽による仲間とのコミュニケーションとなり、音楽の基礎となる力を自然に身につけることができる活動であることが子どもたちの様子から明らかになった。打楽器の音色を味わう鑑賞を行う前にこのような音遊びを取り入れたことは、鑑賞への興味づけにもなり、効果的であったと考える。

そして、歌唱・器楽教材「かぼちゃ」を第2次では手作りマラカスだけを使い、第4次では、打楽器を使って演奏した。子どもたちの学びの様子を見て感じたのは、第2次で手作りマラカスだけにこだわらずに、打楽器を使って演奏させた方が良かったかもしれないということであった。手作りマラカスに限定した意図はあったものの、すでに音遊びなどで打楽器に触れてきていたのに、手作りマラカスのみを使うことにしたため、子どもたちの演奏意欲を低下させてしまったように感じた。また、打楽器を使って演奏した上で打楽器の音色を味わう鑑賞を行った方が、より鑑賞への興味・関心も高めることができたであろう。

「森のカーニバル」の鑑賞では、打楽器の魅力を子どもたちにたくさん感じさせたいという思いをもっていたのだが、学習のねらい(打楽器の音色・強弱・問いと答え)が多くなり、何をねらいとするのが曖昧になってしまった。子どもたちの気づきには表現にも生かすことができるようなするどいものがたくさんあったが、ねらいが曖昧になったために、第4次で打楽器を使って「かぼちゃ」を再度演奏した時に鑑賞で得

た学びや気づきを表現に生かしきれていなかった。ねらいをもっと明確にし、子どもたちの気づきを教師がしっかりと拾い上げ、板書も工夫しながら全体で学びを交流していけるような手立てをもっと考えていく必要がある。

また、「比べる」ということに関して、音遊びの場面では、自分と仲間の出す音を聴き比べながら行うことができ、互いに影響を与えながら打楽器の音を出すことができていた。鑑賞において、グループごとに行ったワークシートによる学習は、仲間の気づきを交流することのできる良い方法であったと考える。しかし、もっと「かぼちゃ」の演奏場面や鑑賞において、自分の気づきと友達の気づきの何を比べていくと良いのかを教師が子どもに示し、交流するだけでなく、対話し学び合えるようにできるとよかった。

5. 成果と課題

本研究を通して、表現と鑑賞の関連を図ることによって、子どもたちの音楽活動への意欲を高めることや、一人一人が見通しをもって学習に臨めることに効果的であることが分かった。鑑賞で得た学びや気づきを表現に生かすことができる力をさらに身に付けさせるためには、[共通事項]を軸にした上で、それぞれの活動のねらいを明確にし、ねらいに応じた教材選択や教材研究が大切であるとする。

また、「比べる」活動を授業の中に取り入れることによって、仲間の表現や気づきに影響を受け、自分の思いや意図が膨らみ、より思いが込められた表現につながっていくと感じた。ただし、課題として、「比べる」音楽活動を行う上で、「聴く」環境をもっと整えることの大切さを実感した。いらない音が無い静けさの中でこそ音を大切に作る姿勢ができ、より充実した音楽活動になると考える。

以前よりも音楽活動を楽しむ子どもたちの姿も見られるようになった。本実践後、クラスで音楽物語に挑戦した。その音楽物語の中に打楽器を少しではあるが使うことにした。「もっと、そのトライアングルは細かく音を出した方がその場面に合うんじゃない？」という意見なども出された。自分の思いや意図を大切にして、学んだことを自分で使いながら楽しんで音楽活動する子どもが育つよう、さらに研究を重ねていきたい。

参考文献

- ・文部科学省 国立教育政策研究所 (2011)「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校音楽】」教育出版
- ・金本正武、坪能由紀子:編著(2009)「小学校新学習指導要領 ポイントと授業づくり 音楽」東洋館出版社
- ・文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社